

# 往復 書簡

拝啓 高木 勇樹様

国産農産物の持つ意味や自給することの大切さ、お米のおいしさや和食の素晴らしさ、農村風景の美しさなど、数字にはしにくいものでも、そのかけがえの無さを、総裁を始め、多くの方が感じていることだと思えます。

前回のお返事を頂いた瞬間、正直申し上げて少し悲しい気持ちになりました。総裁もこのフォーラム読者も、てつきり日本の農林水産業を盛り立てていくのが、お仕事かと思っていました。

農作物はその土地の土、その地に降り注ぐ太陽、その地に沸き流れる水を利用して作られます。同時に水や空気を貯めて浄化し、地域特有の農地生態系や農村風景を創り出しています。それが人々の癒しの場や教育の場ともなっているのです。自国の農業を守ることは公共の福祉であり、世界平和にもつながるもの。なぜなら世界の戦争は食料や資源を得ようとして起きるものばかりだからです。もちろん、国産農産物や和食ばかり食べると言っているわけではありません。食に関しても選択肢が多いことは豊かさの象徴だと思います。

ただ、自分や家族の健康を望み、良いものを食べさせたい、隣国を思いやりつつ自国の風景や文化を大切にしたい、そういう消費者や生活者の選択を奨励し、支援する国で私は農業を続けたいと願っています。そして、農業がこれほどの恵みをもたらしていることを多くの人に知って欲しいと思っています。

国産農産物の需要が伸びれば、農地利用も進むことは間違いありません。農家も確かな需要が見込めればこそ、作付けを行うのです。現在の私たちの食生活は国内農地の約二・五倍、一二〇〇万の外国の農地によって支えられているという事実。これまでのように生産の奨励に重きを置くばかりでなく、国産を買う消費者や自給を心がける生活者も増やすという政策の両輪が必要なのではないでしょうか。

ところで、まったく話は変わりますが、私の友人にも農業をしたい若者がいます。でも、なかなか一歩が踏み出せません。それは、実はパートナーの不安も大きいようです。農村には自然が残っていて、子供や子育てをする親にとっても素晴らしい環境なのですが、選択肢が限られることが若い人にとっては大きな不安です。現実、地方では、教育のみならず、福祉サービスや病院なども選択肢が狭まる一方です。大学全入時代ともいわれ、子供の下宿などで多大な費用がかかるのであれば、都会に住んだほうが有利と考える若い母親も多いのが当たり前です。自分が親になり子育てをする中で気が付いたこういう点を、少しでも改善できないかと日々考えています。そこで、農家の子供たちに対する奨学金のようなものがないかと、密かに宝くじを買っています(笑)。

三回にわたる往復書簡では、率直な助言と激励をあげたとうございました。これからも人に喜んでもらえる健康的な農家を目指し、日本の農村景観をしっかりと育んでいきたいと思えます。

敬具

農業  
大津 耕太



kota Otsu

おおつ こうた  
1975年熊本県生まれ  
98年慶應大学環境情報学部卒業。東京農工大大学院を経て、ドイツ・ミュンヘン工科大学にて修士号を取得  
帰国後「農村景観を守りたい」と、03年から南阿蘇村の叔父の下で就農。農閑期には語学や専門を活かした仕事も行っている。著書は、編集者募集中!の「百笑生活」5年生。URL <http://www.aso.ne.jp/reisi/>

拝復 大津耕太様

私ども公庫もフォーラムの読者の方々ももちろん日本の農林水産業を盛り立てたいと日夜思い、立場立場で努力している方ばかりと確信しております。でも耕太さんも指摘のように、わが国の食は、外国の農地によつて支えられているだけではなく、昨今の中国ギョーザの問題に明らかのように、加工食品もその相当部分が外国に依存という現実・実態にあるのです。

そのような中で国民共通の財産といつてもよい、農業にとつて最も大事な農地の利用率が低下し、耕作放棄地が三万六〇〇〇〇〇畝もあるという事実を、農業者側がみずからの問題として主体的に受けとめ、制度・政策を変化させようとしなければならぬでしょう。皆さんが声をあげなければ国は動きません。活力ある農業が農村の柱とならなければ、そして若者をはじめ異業種の方にとつても魅力あるものとならなければ、耕太さんの思いは空回りしてしまうのではないのでしょうか。

私は、三回のやりとりを通じて、たいそう豊かな知識に加え実践力も兼ね備えておられる耕太さんの思いや感性に、内向きの傾向をみてしまうのですが、年寄り

の思い過ごしでしょうか。

たとえば今回のお手紙で「国産農産物の需要が伸びれば、農地利用も進む」「確かな需要が見込めればこそ、作付けを行う」とのご指摘は、農業側から見ればそのとおりでしょう。ただ、需要側が「国産」選択のメリットを実感しないと、農業者側の思惑通りには「国産」需要は増加しないと思います。なぜ「国産」が使えない場合があるのかということをもっと掘り下げてみて下さい。いろいろな風景が見えてくるはずです。

また、農業をしたい若者について「なかなか一歩が踏み出せません。(都会との教育、福祉などの差などにより)実はパートナーの不安も大きい」とのご指摘は全く同感です。でも、このことは、前述したように活力ある農業が農村の柱となる、真つ当なことによつてしか解決できないのではないのでしょうか。私が農業に活力を取り戻す上で壁となつている農地をはじめとした既存の制度・施策の改革を強調し、農業者側の主体的な取り組みを声を大にして申し上げる所以でもあります。

ちよつと内容が硬くなりましたが、農業・農村・食の問題を真に国民が理解し、国民が進んで支援してくれるようにするにはどうすればよいのか。考え実行する仲間としてこれからも頑張りましょう。 敬具



農林漁業金融公庫 総裁  
高木 勇樹